日用心法鈔三編

中

口 9
1303
8

門 口仁9
1303
8

日用心法後三編中　目録

一 株家督を持人出来し皆株家督を持ちて居る事　二丁
一 卒抱強く慎恐つゝしみくれば物ハ成就せぬ事　六丁
一 慎恐をよく者ゝ大徳をまゝとる事　八丁
一 下女家屋敷ハ證文をそへくれるゝ事　十丁
一 身上ぐらくてハ何ごとゝいふと人の世話をありがちとゝいふ事　十六丁
一 如意寶珠を見たるもあり　十八丁
一 二満三平上たゞのもあり　九一丁
一 一文の銭を二ツハ割て三軒の茶屋ハおくれふし　九二丁
一 利根あとゝわらをたくむ。金の一ツを持てとゝいふ事　九六丁

一張謂亭主の落膳を積りく詩を書てかべゑ張事

一金銀ぶけをた人の上とあり金銀ぶけまべ人の下とある事

一金銀をゑしがるをうりみて金銀の出来る修行をせぬ事

一金銀ぶけをた割合のよい株家督を求る事　三十三丁

一武頃の藝の上も家のやまを黄金の光より出る事

一貪欲の人ハ存ずよらぬ損を致し。そ者りを受る事

金持ハ何を者くもわめくとらゑ事　四十丁

祝儀不祝儀一切の事皆仕舞ふハ

金銀の所へとろんぐくるとらゑ事　四十二丁

世間の人を見るゑ株家督を持て居る人ハ至て希也皆株家督ゑ持をて居る人ぞうゑり株家督のゑうげゑて。

ゆゑ何と御飯をたべる人をうゑり是等も身上つぶす人くゑ

ハよけをた身緒を取立たる者先祖孫ゑ見てハ身緒つ

ぶーの仲間ゑり恥入ぐーー思るべー。又株家督を持とゑ人ハ

御先祖よりのものづりを。段くと継ーよけいゑする人の事也。

ゑ元ハかぶかとくを持とゑ人ゑり。又御先祖親よりのゆ

づりをよくもせぬ人ハ。かぶかとくを持とハいひがとー。株家督

ゑ持をて居る人くゑり。かぶかとくのゑうげでさむくゑくひづる

くふく暮しをくく人くも也。おろつたまとらくべし。家を取たてる御先祖方ハ。三日くらずゐたらてらいたの。五日飢ずゐかせいぐのとゆゑ人くも也。ありがたく思ひて敬ひ奉るべし。何卒ハ先祖方の辛苦を思ひ一際出精おして家門を繁昌さすべし

○いづれ世を渡るゐハ辛抱強く堪忍強くふくてハ渡りがたし〳〵辛抱つよく堪忍つよくふくてハ物ハ成就おぐさし堪忍ハ一切成就の本也短氣ハ不成就の本也短氣ハ其身の股切刀堪忍ハ福德安心の本ふり。是をよくおるべし歌ふ

一生のおり本尊誰ゆゑて堪忍仏とおる人もふし。と我身のおり本尊ハ文殊普賢ハまんとハいくゆけまた実ハ堪忍仏

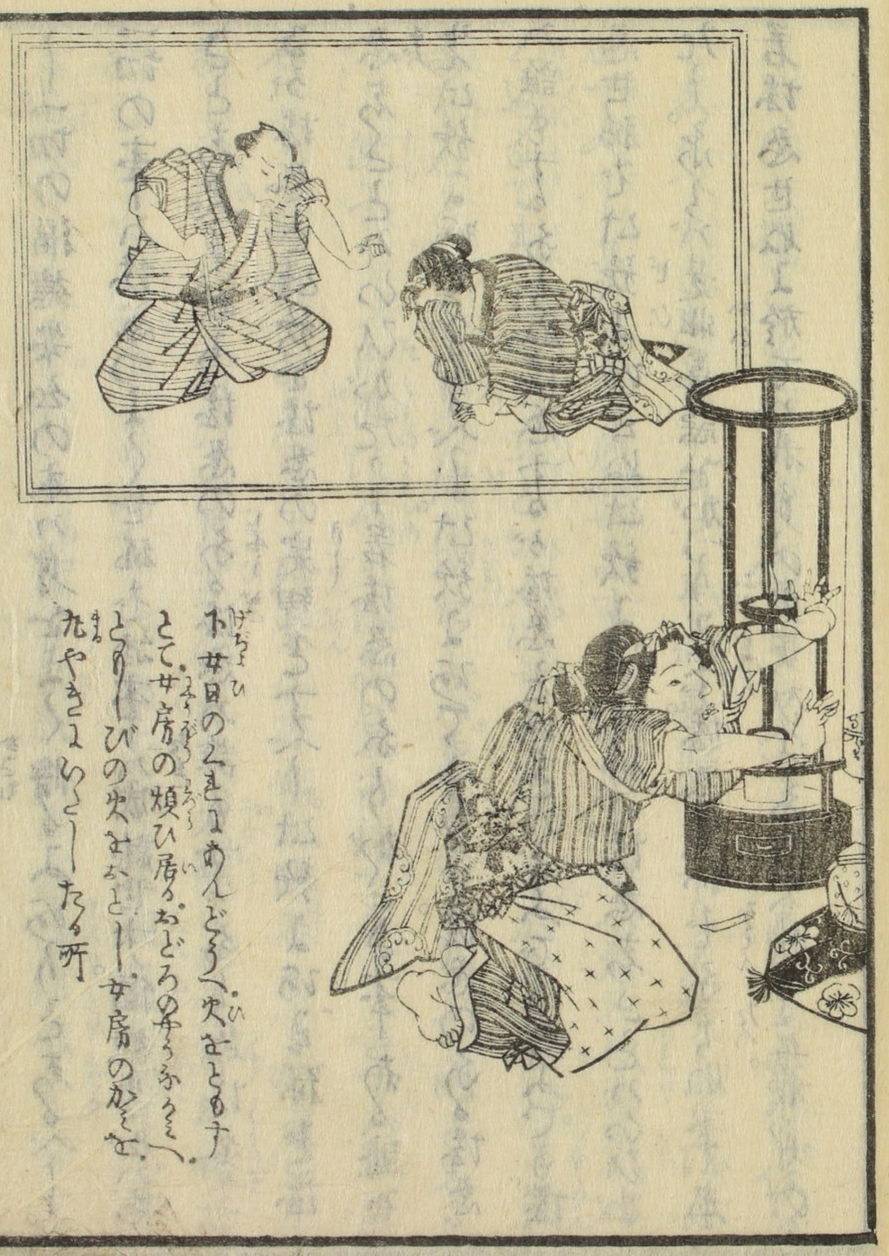
ふり堪忍を以て身をおさらざるとハいひぐさし堪忍と辛抱を以てよく身をおるべし。我身をおらぬ人ハ神もおりあらず。人もかまはぬうらおて貪ふんぐするふり。何卒我身をよくおりよく治めて福德安心を得ゐふべし。歌ふ

○守るとハ身をおるのぐ守るふり身をおるうら孫ハ神もおるぐ

と此歌をよく心得て身を正鍾持奉を第一とすべし。其身正しからざるハ佛神も守りあらず人も見捨てかまはぬうら

おて此事をよく おゆて第一ハ身をよく治むべし。女ハ人男かも尚強身を正おくをべし。女ハ貞の一ツをよくおるべし。

論語ふも其身正おく おて。天下平らふりとゆり。是ふ相違ふ



十廿日のこまこまあんどろ〳〵火をともす
とて女房の煩ひ居るおどろの長うふうこ〳〵
とりしびの火をかとしゝ女房のかをを
九やきこゝいとしゝたる所

し一切の福徳安心の本ハ身をよく修るにありとしるべし。一切の事ハ堪忍つよくせねバ物事ハ成就せず福徳安心ハなきとしるべし。歌に堪忍のなる堪忍ハ誰もするならぬ堪忍するが堪忍と此歌を堪忍の定規とすべし。此歌によりならねバ堪忍あることハいひがたし。若堪忍のなりがたき事ある時ハ。先此歌によりて見るべし。此歌によりて見ると堪忍のなる堪忍ハ誰もするならぬ堪忍するが堪忍といふハどこまでも堪忍せねバ此歌によらぬ。此歌によらねバ堪忍あることハいひがたし。ならバ是非善悪をかへりみず堪忍せねバならぬ事也。若堪忍せぬに於てハ我身の大災ひとなる。大損が立我身の

大災ひ大損となる也。どこまでもどこまでも堪忍するに勝があるとしるべし。これ心によりて是非善悪をかへりみず。よく堪忍をすべし。是をならぬ堪忍するが堪忍といふ。若又仏の教にも三返まではほとけも腹を立といふ。此方も後に度かさなりてハ了簡ならぬと堪忍袋の緒が切たくならバ家身のやぶるゝ時としるべし。既に内匠頭殿も堪忍袋の緒をきらさずバ五万石ハ今にある事なるべきに残念千万也。若堪忍なりがたき事あらバ猶心を静め月日をのばし。大石に申付計略を行ひなバさぞ本望を遂べきに。短気を起し。事をいそぎし故に大ひにあやまりたり。是ハ塩冶殿斗りと

そなへべからず。皆人々の身の上にある事なれども能く思ふを
廻らし。人事に怯恐すべし。短氣に其身の販切刀といふ事
をよく考るべし。是にまよひて怯恐袋の緒に伝家宝迄もうち
すべからず。若きうち世に家身のおろぶる時と考るべし。まこと
今迄の功も水の泡となり。福徳を失ひ家来けんぞくに迄
難儀をかけこまり。此道理にかなる事をよく考へて伝家迄も
よく怯恐すべし。怯恐を仕遂ぬに於ては。よく怯恐を考へこと
いひがたし。是非善悪を分りえず。あらぬ怯恐に人事に
すべし。怯恐
綿ふもあやふもあらぬ怯恐の袋のひもに人事あり

まけてのく人をよそにとそふるよ。智恵の力のつよきをいふ
あの人に無慶なりもつよいとは。怯恐づよき人をいふ
是等の欲をよく考て怯恐に大功徳ある事をよく考へ
遺教経にいはく。恐の徳たる事。持戒苦行も及ぶ事なし
ずとあり。此心は法華に武百五十戒五百戒を持つかもどれる
ゑん行苦行するよりも怯恐なること方が功徳が深いといふ事也。
持戒苦行よりも勝るとは怯恐の功徳に及ぶ者なし。
此事をよく考へて人事に怯恐すべし。いづれの道にも。怯恐
つよく。辛抱つよくなくて。物事成就せず福徳にあさと
考へべし

教訓草に人間に男女たに。身終る迄。大切に慎まるべきに。
恭恐の二つあり。切に幸に身にてもたゝ恐んで。我ゝに幸に世
に是非たる人に隨ふの心也。先婆婆といふに梵語ことばなり
日本にては恭恐といふ。恭恐に居ながら恭恐するにはたりまへ
なり。いづれにしても。ゝゝゝゆゝゝなやむといふ事なり。別
して女子に三從の道あり。生れの後に行に幸なりがたし。
幼にては父母に隨ひ。さかりに成ては夫に隨ひ。老ては子に隨ひ
て。一生ひの後ふるまひの上なり。たとへば父母や主人に隨ひ
理を作せらるゝ時。夫に法理といひたけども。夫に恭恐
して。ないゝとこうけ申に上て。是非たゝに隨ふ事なり

憎き股立ひたき事にてなりけるとこゝにていはぬを恭恐と
いふ。扨に恭恐にかゝるに人の爲なるつまる所にの身
の爲といふ。恭恐する人に。福德も安心も仏も聖人も
恭恐をよくする人に。福德を得まふべし。右の
教に用て。私に生に身て氣が短に成に其恭恐がどふも出来
ませぬといへど。其短い氣といふに何に何すれば是せるこを
といに生て。はて答にこまりしとぞ。氣の短いといふに畢竟
我儘なり。短氣我儘に生に身の毋に申せたゝ中にこにはつ
ずに生に身の病ひにあんぞ。上下強弱の差別にはつゝにや。其に

い威ある主君賢き父或ハ行儀正鋪親族又ハ傍輩迎る。頭立たる人の勇氣是き〻正直ハ義を好き言葉七げ愛。歯ハ衣きせぬゐどりふ人よいうでう短氣家侍の挙動出来かたし。唯子の愛よおぼえたる。口甘き母又ハ行ひのろしかゝぬ伯母君愚なる友達抔ハなるゐどりて。ゑれとゐし日下なる下紐の類ハ非俗非道家侍のふるまいハり。是皆恥辱ゆりかとりたる事也。ハるゞ生れ付あゝうんやひとすゝ家内をかゝりえて。かゝる行跡ハるべゝ子歌ハたんきあり生れ付おやと思ふのハ。ゆゝ不ど我身勝ゆる箇。山代歌ハ和遠ゆし。短氣ハ生れ付あり抔ハ海ハ勝ゆの不届あり。生れ付ハ上下強弱の差別ハゝうんや。急度改むへ

○又恐をうくすれむ。物事成就して。福徳の来るとハよ咄ハ或人の女房ハ家風の公地と病ひの床よ打ふしけるゞ。さまで六ケ敷事ハ無ハ彼是とりハれて。髪ハおどろのごとくゝ乱れ。まゝをかくすゆゆうゆりけれむ。今日や人よむすむせん。明日や取上させんと思ふ。ゐ任せずて。日ををごしけるゞ。其家の下女ハゝゆふぐれよ。あんどうをともさんとて。火を持来りかの病人のまくらえよて。火をつゝかき立るとて燈火の炎先を落し。病人の乱れ髪まゝ付しかゞ。おどろきあとて。急ぎけえとすれば乱れ

髮ゐまだ。其所は所よりく付て。中て消しうる事はなはだ。けがるゝ白ひい家ゐうちて。眞持もゐりがゝし。病人おどろけたおきかつるべき氣カもゐく。唯かよるきまをのゞしてかしらをゐでけるが。是とてもけしうることはなはだ。髮の毛は皆中けたり。尼法師をゐるやうゐゐりけまだ。下女は死も失たさゐよて。唯泣ゐり外はゐりけ。おたぐひまを。ゐる。廉相ゐて。左様はるべき善の事也。家のまゝを始め家内の騒動大方ゐらず。夫婦人をはんでこひ。親たを引おけてこい。其ゐゐ差置ぬと大腹立の大さゐぎゐり。病人を用て重き枕をはげて。主ゝゐ向ひ申しけるやうはたましも。

怪我はのやまちを。好こてする者もゐし。かゝる廉おもためしをくゐき事ゐまた。さまゝとて。彼下女をおゝ叩き。せめいうたはの益はあらん。又親信人をよびよせゐんだはをいひうけがまらを。ゐる者あたり左。自かゝらの髮が長ゐのびるといふでもゐし。病人は使てかをかたちを整ふゐてもはらざまだ。ゐげうさしぶ者ゐうせだ。人者まず源事事ゐり。病氣全快近日をゝうす内よい。髮もまくぬべし。唯穏使よ者てかまゐふ以後急度たしゐめとは者ゐうは拵しまゐ上ゐて。序宴免はるべしと。妻のおとゐしきゐ主ゝもいかるゐをまげめ。せめもさく事もせざりけ。下女ゐの内

いかむとうりうのりがくこうくん。たとへを取ふ物ゑし。はち恩をむ。深くゐひて。神明佛陀ふ立願し。何卒市新造様の吉病氣早く快全快遊むすゆうふと。身命をゑげうりて。伝神ふ祈りけまだ。其奇持ふやりけん。次第よ快氣ふおもむき。月日をかさ孫て。平愈あるしかだ。ゆんけわろびたる髪も。今ハうる丸ゑくまへのびて。首しふかるるごりしと。うや。是等の事ゑ往く考へて。法慈をおゑふべし。実ふもやさしきゑあり。其時ト女ハ十七才也。夫迄ハ此ト女。日ゑ暮と。居孫むりむかりを去て。仕事ハ吹しも出来ゑ朝ハ八ようらまてゆるいても。ちらゑふ。孫て居て。朝おこすたるりとも。大ひふせゑの母けたる事ゑて。大ごまりゑりしゑ。此条お以後ハ。吹しも居孫むりする事ゑ。ゆるし。見ゑ盃の母ふ。ふ去て。急度夜の四ッ迄仕事をいるこし。朝ハ紙ふおこさきたる事ゑ。昼夜ゑ也を考して。主人を大切よ思ひ。かげひゑるく。仕事を出精いるこし。前後左右ふ機を分て。夫婦の流の思ふ母ふかいいまよへ。ふの届くやうよ。仕へけるゑ。主人も後よハ。奉公人ともゑ迄ゑ。家内の娘同前ふ思ひちらしけるゑ。月日ふ関る居ゑ迄ゑ。りもや七年の春をむって。縫針の道もかしこく覚へ。神妙ふ物事やさしけまゑ。元用の人くもあまりやさ鈍よく働きけまゑ。嬉よ実ひたきとひふ人くも多うりけること

し下女が父母のむかもよめいりとゝ。ろ〳〵ども。主人の情け
厚け事ゞ。定めてかゝゞ身の行末如何ゝ思ふべしと。ゝ
ふ遠ひふく。或時下女が両親をよびよせ。主人夫婦申さゝ
けるやうハ其方娘幸ゝふし〳〵頃の麻おゝ織せし。情けの
言葉をかんじ。恩ゝゝゝとず。夫ゝ奉公の仕方世ふ類ひま
ゝある。忠義を尽し〳〵かげひゝふくゝ仕事をいゝとし〳〵又如ふ
かけてつい〳〵おきやうふせし有よ。我等も大きふ力を得て。今ハ
身上も大分よくゝゝ成り。其ゝうびと云て。家屋敷つゝ所つ
ゝゝとて。證文を二親よりけ事ゞ。ゝ悦び限りふく。
天ハも登る如地よて。いりがゝ個ふ仇ゝむ。扨二親ハ仇合ゝさ

聟をゝる孫けゝ。下女ハ一系用いゝず。かゝど近あり
がたき主人の情厚恩を受ゝ。若や麻忽の人と連添
ゝゝ。扨角の情恩を無よせ。もうりがゝ。縁ハ出雲の神
ふ任をべしとて。年三十ゝる迄奉公をつとめけるゝ。又甚家
の番頭よよい者あり。此家の白鼠とて。ゝく金銀をゝふける
有よ。此人ハ身上をゝく持事難ひふ。夫ゝゝ人の善
ふ不ふて。此番頭の妻とゝり。夫婦中ゝく云て。家富榮ゝ子
孫繁昌云て。今の世近代ゝお續云て。江戸本町の内ゝて金
銀数多持て株高き家とそ。此人の住所也又主家ハ江戸
金吹町近迄ゝて。地面諸株金銀財宝を数多入持て大家と

下女七年勤つ。大ひなる恥を
おをのこせしを主人よくかん
まんあて下さまてる。大事を
あらて。大功を立てるのいみ。
主人がそのよろこびとして
家名を一ケ所。陞文をそして
下女が支配人ゆるす所

ふ也。十人所とあり。門構一の町人こそ。法恐をよくあつまる也。家の未孫也。是法恐つよきより。かゝる大幸福を得たり。こゝ也。ゑ初稚の時より法恐をしよく辛抱あて。大福德を得あくべしとあり。此女房はよく法恐をあつ中く女のかとあてゝ。ありがたき法恐あり。をべてをかい髪形ちを大事と後し。大切とする者也。甚大切なる黒髪をやり是てい中くイ簡ありがたきを也。一通りの女あらば。打ちやうちやくいはゝりまへ。甚上よてゝんだいをいひうけ。此方が病氣で居るを聖ひふ髪ゝ火を身やきころさんとあつ不屈至極の女。家焼人殺よりも重き大罪人甚分で差置がたし。親請人をよんでこいと。いかりのくあるいあつとりまへ。をり。を大ひなる無相あり。たぐひ希なる不倒法也若夫より恐く病ひ重りあい。死ふ至まんもむかりがこし。是ハ誠ふありがこき法恐也。裏ごいかるべきを。丈よいかるゝもあくけがのやまちハ。誰も好をする者もあし。親請人をよびよせ。あんだいをいひかけたり。自からが髪がをゝふのびるといふよもはゝず。そがらこゝ簡すきゝ。よいうらゆふめんを去てかりてやさきとハよくいふた。是ハいひがたき口上也。かゝる事一を五所の親連が聞たら。喝悦びませう。伏拜こく二拜九拜をるあらん。神とやい2

ん。仏とやいふん誠ふかりがときは底あり。人くは女房の事
を見ぬふべし。又怒をおてゆさまたげ女も大ひなる徳を
いたしたり。女房を人の怒をおてやさまたげたりがた
くいひて。夫分はいまかへ居孫むりむりおて居と者が
文よりちりとも居孫むりせを。朝もつりおとさまてゆり
とおきと者が。夫分朝寝おて事あしおきてよい的ふふ
。毎度おきてもつとき。夜昼主人大事くとつとめ家
。甚ゆうびとおて家を業一ケ所貴ひ。子孫繁昌せしへ。
ありがとき事也主人の怒おてやさまてをかんじて身
を慎を。昼夜忠義をそしてつとめしへ女の徳分あり。

怒をおと女房の徳へ。ゆげてかぞへ。第一書物ふ
をかきのせらまを。世間の人よりめらまを。又是を見聞おて。
怒を仕習ひ福徳安分を得る人幾千万といふ事へ志
きがこと。第二ふゆ女主。家屋敷一ケ所も主すへ。女ぶ
家内の始末をよく致し。家のるりとあゆて大方地面の
七八ケ所もふたるあるべし。さもあくてへ。女ぶ一ケ所の地
面へやらぬ者也。女房の怒一つより三方四方の大徳とあゆ
たり。実ま怒へ福徳のまき出る根本あり。是怒へ諸願
成就の本短氣へ一切不成就の本あり。何卒人くは事をよく
おゆて怒強く辛抱強くおて大福徳大安分を得ゆべし

拙如年より恐恐の事を忘けたり。こまふよりて恐恐の事よ分て。色くに咄し申度事なり。長けもも家ふ奉公おろ〻がゝこゝ四編を待べし

○何卒身をよく慎め家業を出精して。家を齊富貴繁昌の人とあるべし。身緒がよろくてゝ。ぞとりふと人の世話よあるがちも也。至てよろゝかゝむぞこまもあんぎをいゝこゝ。人よも苦労をうけ。損をかけて。自然と人の下となる也。こまふよりて。わども貴を好苦労を去ても。身緒をよくをべし。何安うの智恵ありといゝども。身を治ず家を齊ずぞ去てゝ誠のよき人とハいひがゝこゝ。智恵の正智ふ

ゝらず。邪智あり。芸能も芸能ふゝらず。放蕩とある。又芸ゞ身を助くるからよいとゝふ事あるとも。拙奥楽をとゝふのふゝらず去て。芸能高貴あり。琴三絃浄瑠理おどりうたゝまい謡太鼓茶の湯立花おりきく商賣あり。人ふ頼まゝ丑ゝ丑ゝて家僕同前とある。家ふ至て芸ゞ身を助るわどの不仕合とゝふごとく。芸能を楽むとゝふ趣ふゝらず。芸能高貴あり。又身をよく治め。家をよく齊て。芸能あゝて。甚芸能光りゝ出て。人も賞美ゝゝこゝもあぐさを楽むとゝふべし。是極上吉の人也。正智正行の福人あり。相貌よくゝす。所ハ発句

の一句も口ずさミ。又花の生やう。茶の呑やうも。志りたきもの也。又も生得て不得手なるがあらバたすくる本なり。少しも恥とはなるべからず。身緒をよろしくして。一家親類へも睦合力をいふよりは何ほどよきこともなし。又中以下の人〻は芸能はなくとも家をよく齊へて土蔵のかべをおとさぬやうにして家来けんぞくをよくやしなへ。丈夫にて上〻吉の人なり。外に何やうの芸能ありとも身を治め家を齊へずしては正智正行のよい人とはいひがたし。主人株とはいひがたし。先は家来仲間也。金銀米銭ぞ貯ぶん相応になくては役に立ぬとしるべし。従倹不従倹ともに。

眞先へ入物也。其は眞先へ入大切な物がなくては迷惑千万此上はあるべからず。釈尊も死苦は受るとも。貧苦は受べからずと仰せられたり。貧は諸道の妨げ也。四百四病の煩ひより。貧ほどつらきものはなし。貧ほどの大病大苦患はなしとしるべし。ことによりて何ほども身を勤ミ家業を出精して。金銀財宝を沢山に持べし。金銀さへ沢山にあれば。愚鈍でも不男でも。智者芸者が出入をさせて下されと。はやまりて頼みに来る家に至ては金銀の光りはありがたき物也。又金銀があれば主人となり。金銀がなければ家来となる。家によりては金銀はありがたきもの也。

目よりて知るきけたる事也。行ゐどゝ理屈をいふものでゐ。いひ妨けをうゐゐるべうらず。又ゐる人がいふよゐ金と
いふ字ハ。人のまとかく。是を上ゐよゐあゞ。主人とゐる
芸ふようゐて金ぶゐるをゞを人とゐり。金ぶゐるけをゞ。家来
とゐるといひしゞ。是も也。道理ゐるべし。欲ふ
○金根ハ神や仏けふ主親と。恐をゞたゞけとを。考へべからず
○人ハ只智恵や藝ふハおそをゞ孫ど。金ふハ恐る金を持べし
是等の歌を以て金根のゐるハ。いせいもあり。自由も楽を
もゐりとゐるべし
○拙ゐる時。大家の大金持の所へ行しふ主ど申さゞをうハ。

貴ゐ如意宝珠を見てゞ事ありやといふゞ。ゐふ名ハ聞て
居をゞ。未ゞ珍ふ見ゞ事ゐし。といへゞ。主どのいふゞそをゞ
がし所持致したりゐゞ事ゐふくゞ。ゐゞ申さんといふゞ
ゐふ。何卒拝見致したし。扨日本ふも如意宝珠ゐりやと
いへゞゐをゞ。ふをゞ至て希ゐる物也。貴ゐハ欲深く志て
邪智を行ひ役ふも立ぬ虚口斗りきかゞゐふ。嘶の種ふ
もゐらんかとゐひて。見せ申す也。慎んで拝見ゐをゞと。恵投
立て文庫ふ入れ。拙跡ふて。ゐひけるゐうハ。金翅鳥化志て如意
宝珠とゐるをゞいひ。又時輪聖王より外ふ。持人ゐしとゐいふ。
ふるふ今家伴のまゞ持ふふとハ孫家事也。我又其孫家事

を拝見するとハ不思議の因縁也と。天へも登る心地して相待
所ふ亭主宝蔵の奥より三宝ニ箱をのせ其上ニ紙布を
かけ。うやゝ敷持出拙ゞ前ニ指置。ゆ水をひ紙布を取
て拝見せらるゝとハいふ。先ゆを洗ひ口をそゝぎ
ゆ〻らむ兎とうやゝ敷。ふくさを取て拝見するふ。ハカニ
如意宝珠ふハいらぬ。千両箱也亭主見ハ千両箱ゆり
金銀ゆらハ拙者も二両や三両ハ所持致したり二百や三百
の小きひふ。こまりし事ゆし多い所ゆいハ者も角も。
金銀ニ相違ゆし。此方ニも所ゆる。金銀ゆり。ゆるふ。如意宝珠
ゆりと。人をたゞかる偽り者。返答ニよりて手間ゆりいか

ふゝと結かゝ是ゆ。でいゆ西大ひニ知りていらゝゝ。貴ゆ
ハ吹く智恵分別もゆるかしかとゆひゝふ以の外の大馬鹿也。
金銀の外ニ如意宝珠ゆしとゆふ事をゆらゝゆ。金銀ゆ世
界第一の宝とハゆ。ゆ有ニハゆらゝふとゆらゝ。金銀ハ如意宝珠
たるふニよりてゆり。其訳かたらんよりけくさけ。如金銀
のつゆだニハゆ是ゆ一切ゆの供ゆり。先第一よき家ニ住たい
と思ふゆ是ゆ。金銀さへゆ是ニ出来る。ゆの供ゆり。よい家ゆ
ゆ〻しい。金銀だふゆ是ゆ出来る。如意珠ゆりうまい物
がたべたい。ゆでも金ゆ次第ゆ。ゆ上菓子でもようかん
でもゆるへいでも。青でも。ゆでもゆでもゆ如意珠ゆりよい道具

がわしい。金銀さへいのまだ亜ふ求めらるる公の侍あり。又吾光寺へ糸りたい京大坂ぶ見物致したい。大和迄りぶ致したい。侍勢や熊野へ糸詣ぶ致したいとゐへど。亜ふ出かけらるる。若し豆ぶよろけまだ通し駕籠よてゐく。豆のよろいもかまいふし。おかごふのりてろりさと出るけ。万事自由自在ろろの侍あり

○京傳ぶ戯作問答ふ千里の道を行も金銀ぶいのまだ馬かご舩の自由たりて少しもくるびまだ。豆金銀の威光也理ふのりて。波を走り。籠よのりて。空を飛仙術よりも。仙術ぶ早道ふりそこで。銀ぶいまて。腰よさげる物を。早道といふ因

縁ぶいろまかくのごとしといのり。こまかるロふまども。道理いかくのごとし。合点仕安きたと へふり。又小を銀ぶあけを。ぶ浅草の観音様へも。雨帳糸りも出来ぶ。四文のぶをさも八文の主目ぶ紙も弓る事ふりがたし。世ふ小を銀のふいい首のふいよりもふとりふり又病気といふ時分よも金銀さへいのまだ。よい序医者と頼ま高価ふ薬をのんで。公の侍ふ療治をする又仏抱人も数人も身置て大切よする。又貧乏ふまだよい医者も頼む事出来ぶ。仏抱もゆき届きぶたし。死る時ぶ天道任せよ云てゐる様ぶ。豆ハ貧乏のかふしさ也又金銀さへいのまだ。よい医者を頼ま。よい仏抱人を頼ま。

如意寶珠を
見せるとて
千両箱を見
せる所

よい術禱者を頼ミて。病氣平愈長命富貴を祈る也。
又かいぐすりをてよけをだ。三脳ふゐりた。真珠ゐりた。
熊の膽地黄人参ゐりた。ゐーい薬ゐ亟ゑ求めゝまる。其
外何ゆうの薬も。至次第金銀ゑて求めゝまるね物一ツも
ゐー。日本の妙薬ゐ石ゐ。唐天竺の妙茶。熟酒川の魚
でも。ゐの侭ゐ求めゝまる又金銀さへ沢山ゑ。ゐのまだ。日本の
名物ゐ石ゐ。唐天竺ゐゝんだいぎりす。ゐろゐや等の名
物。孫會奇熟等迄も自由自在ゑ求めゝまる是金銀さ
沢山ゑ。ゐのまた。高位高官知行ゐるゐもあゝる也。一切万物
金銀ゑて調ゑぬ物一ツもゐー。ゐの欲する所ゑ隨ゑ是を如意

宝珠とゐゑゐのぞ。間遠ゐゝんや。又ちやんころ一文ゐく
てゐ。ちやんころゐゐ。よい家ゑも居りがさ。よい着物もきら
をず。うまい物もたべゝまをず。よい衣食住ゐ拵置やきいも
も。豆腐のかゝも。ゐの侭ゐ求めがさ。是を不如意とゐゑ。
金銀の一ツだゐ。ゐまだ一切万物ゐ一ツ物ゐ求めゝまるまて
立花茶の湯謡ひ舞琴三味線等の技芸もゐの侭ゑ出
来るゐり。是等のゐぐさもゐ。金銀がゐくてゐ出来ぬ事也。
又上髪でもゐたゝくでも。二満三平でも。二満とゐ両のゐうの
とゐひたいと。ゑるとくち。彫造でも。かゐろでも。畳三でも。若庇
びると。たいゝうゐるとゐゑ。三平
でも。ゐのでもかでもゐの侭也。ゐ方かゝ頼まずとも向ゐより。

ぢよう用がなるあらば。幕りまはせう。何の相伝ふものりませうと。
先方より。持て見つる。何の事も公の侍也。何でもいふ目が
出る。何と金銀ハ如意宝珠より間遠ハなるべからず。川柳ぶ
発句ふも。なたくうる。中ハふハとけるゆきのたぐ
。わきぐすり佐渡から出るがらのちきく。是等の口号
ふても金銀の如意宝珠たる事をよく考るべし。何やど不男
でも。年寄でも。金銀さへあをば。すきゐ女ぐるふ入小野
小町が妹をえる中うゐ。うつくしい女を幾人もあらべて置
て楽むあり。又傾城ぶ買たけをば大門をうつてゐ前
のすきゐ女を。幾人も買て楽むあり。金銀さへなを公

の侍あり。又何やどよい男でも。若くても。芸能一文いふしの
あくてハ。切足世へも揚る事ハ出来がたし。況や大夫世へハ。
猶く。のぞく事もありがたし。まして其外の女ハ身ぶる
いを者てきろふあり。若近分ふ者也。亟ふ根筆をかりら
ぬ。ちぐろふさをて。つまらぬ身とある。又事ふふりてハ
ふ切をよこせ。酒代をよこせと。孫だりごと。ゆすり言を
いふをて。外聞ろろしさ有ふいづをの女も変をて。ふせつけ
ねあり。若ふせつけたら。地ごくへ落たも同前ふり。いづをの
女も此事をよく考へて。初めうら近所へも表分ぬ也。実ふ
至てハ。貧乏やど不自由ふ。世ふ捨らをてとりのハふしと考る

べし。四百四病の煩ひより。貪不どつゝき者ハふゝしとめふ事をよく考るべし。貴公是不どと金銀の尊き事を考ゝず。自由自在の如意宝珠ある事を考ゝず。夫れふ不如意貧乏也大事を大事と考ゝず。宝を宝と考ゝず。此れよりいつでも不の字ハもるゑぬゐり。何卒此後ハ大事を大事と考り。宝を宝と知りて。親主人の如ク大切ふ考て。一徒も虚ふハ考ふべゝらぞ。初めの欲の通りふをべし。金銀ハ神や仏ふ主親と恐ゑ敬ふ考ふべからずのゑをゝく考るべし。旅ふど。出も一文の銭を二ッふゝりて。二杯の茶をよゝく考ふすべし。是ふ又あまり考ゝい此他者ハ考ゝんがゝうとえんつる　右撰の心持でゝく〳〵てハ。金銀ハ持ぬゐり。

ふ是ハ又世界の益ふもふり善悪善根の事ふゝゝを おしげふくいさぎふく考ふべし。何事も時所ふゝりて たゝうゝふべし。略いをかりも役ふ立ず。仁事も役ふ立ず。又氣の大きひをかりも役ふ立ず。仁事も中道の身分相應の所を通る 益し。ふ是ハ三分一ひかゝて事を行ふべし。左撰ふくて わ未ふまとまゝらぬことありと知るべし。欲ふ。金銀をき ひ捨るもたゝけ者。くゝるずふためる人もだゝりのゝ歌ふ てよく考ふべし。又是程ふ自由自在の大切ふ。金銀ふを ゝ人撰の物を変ゝて。ゝ〳〵がるべゝらぞ。たとひ十さゝ事 ゝりたゝめ用たふ貴ゝらぬ事ゝふをべし。ゝ方ふ入用ふをゝ

様よも入用也。学て少しもわしがるべからず。唯身を治め心を正直に家業を出精して自然天然の福徳を求めもよべし。無理せず無理いたすべ。道理至極の所を通るべし。是を誠のよい人といふ。天禄を得て安心ふくらす人あり。ふる邪智邪欲邪分別の愚人たち。日夜ひしくせくする。金銀浪人少しも持参ふるりがごとし。是ハ仏祖とらふ仏聖人の教つふ背きて無理非道の金銀をもふけたるふうの事なり。無理非道ハ仏神聖人きついおきらひ也。仏祖ふおきらいとらふ。損恥の道ふるふうの事なり。皆人ぶ福徳を好きふぶら。其福徳の来る道ハ

偏ひ世ず去て。猶ひの来る道をかりを行ふふ福徳ハ来らず去て。実ひもかり来るあり。たとへ人の来る事を頼ひふぶら門を閉ていたざるがごとしてんどうの喜ぶ也。福徳ハふき善ふふり。無理非道ハ損恥の道とらふ事をしらくあるべし。是さへふくあるとも外の事ハ自然と君子の道ふ叶ふふり。若又無理非道をあて。たわくふる金銀ハ亜ふふくふる。又師ふて大ふん出ぶうが来ると思べし。大学ふいはく。貨悖て入時ハ亦悖て出といはり。けだし貨を悖去て。取去ハ又無理ふ取ふるふ事也。ほふ無理を去て取つ取ふ門ふる有ふ後ふハ奪ひを起去て乱ふ及ぶとらふ事

あり。けだし富貴の君子は。たとへ富貴なる事はなりたる。
無理をなしてはけりなしてあらざる也。又無理なる富貴は必ずなして
預らぬ也。愚者小人は無理をなしても富貴なるべしとす。至
てはなはだ。未だ大損となる。金銀は必をなしたり。無理をなし
ても。必ずなして持ぬといふ事をよくあるべし。けだし金銀を
持たいと思へば人々は先身をよく治め心を正直になして。家
業を出精し。豆る事をなして少しも奢りなく。唯順道
の行ひをすべし。右様なれば金銀は預らずとも。自然と
出来る事疑ひなし。然るに無智の人はあぶなき事をなし
て。金銀をりふけんとする故。いつでも回遠ひが出来て大損

をするなり。いよ〳〵貪多とあれども。未だ裏店へ引こと
又は在所へ引込んで親兄弟の役儀とある人多し。氣の
毒千万也。何卒此教へを聞て無理せず。無理いたさず順道
の行ひをなして。福徳を得るべし。是ぞ近道上分別此外に
福徳の来る道なしとなるべしとくどくもかへすくも。
示しあり。大家金持の教へは又格別也。無理非道山事をな
る者は金銀は持ぬといふ事。今更よくあらまたり。又金銀
は如意宝珠に同遠なし。身をよく治め。家業を出精して。
金銀を沢山に拵へて世の中を安心に送るべし。こゝを誠に
めでたき人といふべし。此事をよく考へ知へ

○如意宝珠の事は大論五十九巻に委し。長けさ八寸
に略す奇妙不思議の功能ある玉なり。ゆゑ願ふ所の
たからを生ずるなり。又天台大師法花経提婆品の註
に七種の如意宝珠の事を釈したり。是は深秘なれて
容易に表さがたし。こゝまでよりてあるさま。又授記品
第八の註に。金銀は万法系譜の体也。我等が一心の全体
を金銀にたとへたる事。一心の金銀を悪くつくむ。悪業
をかい取て悪趣に落る也。又よくつくむ。善根功徳をか
い取て。成佛をとるなりといへり又安見字尺くみいろ〳〵。真
珠は貝の王。龍珠は頤にあり。蛇珠は口にあり。奥珠は眼
にあり。鼈珠は皮にあり。鼈珠は足にあり。蟬珠は腹に
ありといへり。此外地蔵菩薩の持ち給ふ如意宝珠の変
あまたなれどいひをしがたし。又真珠に仲無真珠。
大村真珠あり。是に付て奇妙不思議の噺しあり
四編を待べし

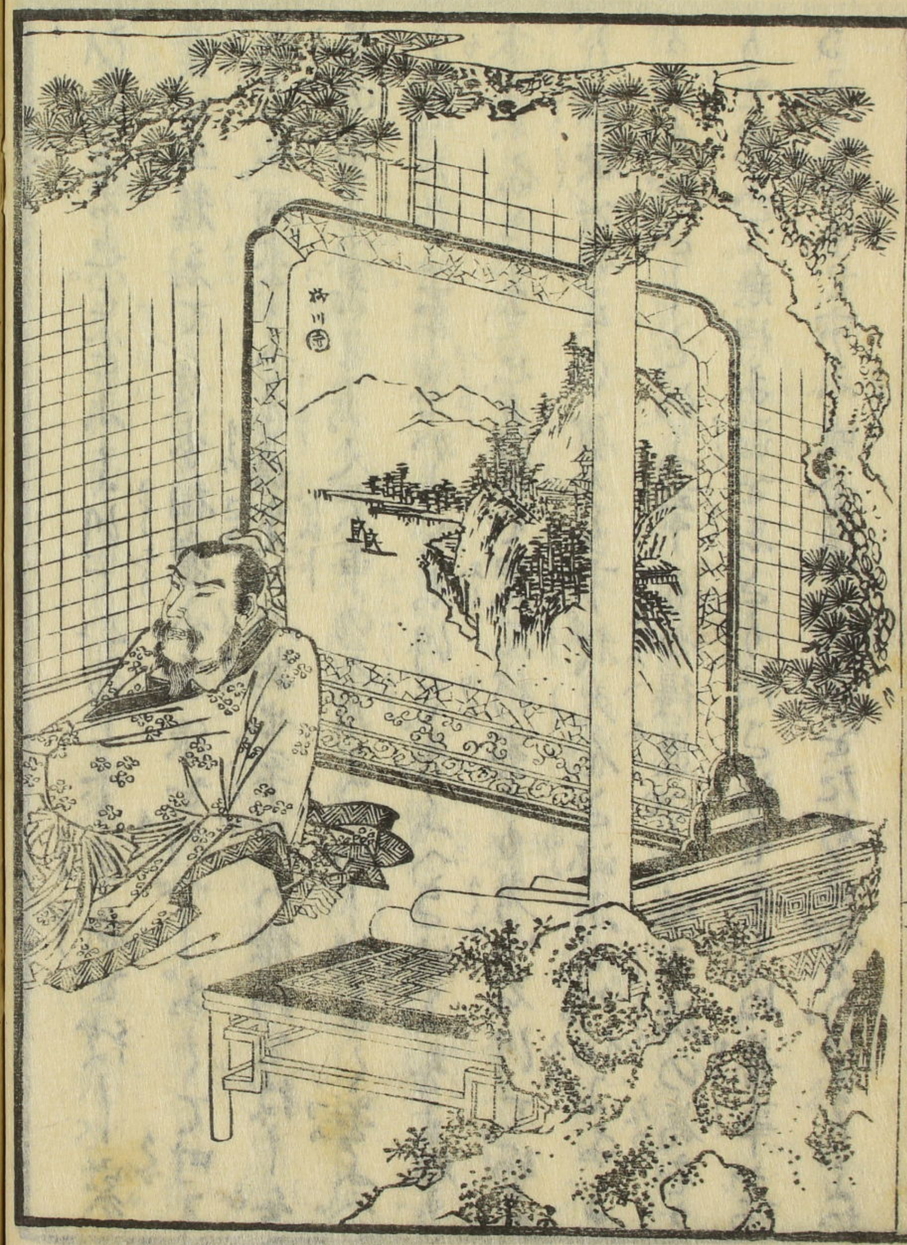
○ある人相見がいはく。大利根者とあめらまたくば立花
右うきく。琴三味線浄瑠理欲俳諧等を上手にする人
に。金銀の一ッを持べし。金銀の一ッを持者は大智者とある
近道也金銀さへ沢山にあるのまた馬鹿でも。利根にえらる。
いま奉がよく通るゆゑもとゞかぬ事がよくえらる。

どのやうな智恵能でも。金銀さへのあるだ。かゝらだ中が智
恵のやうなえる。裏のやうなあうとだァなでも。大かんおや
く持のでいおやでも持系金のよめおいまけて居るだァなな
もむこなも蛭ふ塩うけたやうふ河でさげんむとるでい
おやよめふ話仕をおては飯をたべさせる。よめぐらよいふ
まへのやうふ系のよいでいおやい家ふい。家の家よい荒神様
ぐふいそへふといへだでいおやふいへとろて居る。何と金
銀の威光ハひどい物ふり。若持系金がふい位あらだァな
のひたいふハ。角ぐ五六本生へ。毎日のいひ事小言也又むこ
なハ大かんおやく持ふおてのむこ馬ふり。近所へも家付が

たしへふハ中ゝ辛抱も法恐も出来がゝしへ事ふふ河
たゝら不縁とふらんも右ゝがゝしへこゝろや恐ろしへや鬼
なゝァふ鬼むこ也何ぞ其中ふ右ゝかりのらんや又金銀が
ふけ主ゝだ智者でも馬鹿ふえへる。学者でも文盲ふえ
へる。人ぐ用ひぬぐふ事ぐ通らぬ。又何ぞ機ぐ大きく
てもへ文ふへとときけだ。右ゝおいか河ふおとる。格へても
きへとふくてもへる河ハ何所で出ぐ出来るへるふうふハ
こぐおゝる。ふいふかゝらこぐおゝてたへへふへふへふいや右い
者でも。人ぐ下ふふうぬ。上へ河のげる何でもかでも金のへる
河ふハ叶ゝるぬへ切の芸能をよへ右ても。金銀を沢山ふ持て

居る人をどみわ。孫義せぬこと也よ川てこ切の養絲をよく去て。人よりやゝもんとするよりハ。金銀のつゝを持て。利根発明の人とふるべし。是大智者とやゝらゝ近道也といひしゝぶ。万ふり。夫おやからこ切の人が後生大事ふ金やゝ。死んでも命のいるゝ。ふと頼ふ事也。金銀さへいのことだやせた男もふとくこんこる。不男でもよい男よりこんこる。業ふ合からこる時ハ。大黒孫とこんこる。万事いふ事ゝが。よく通る。万事自由自在ふ。金銀さへ沢ふ。ゝこと無義でも愚拙でも智者義者ゝ出入をさせてやることを下て頼こふ来る。何事ゝも自由自在也。金銀の威光ハ大

ひふる者也。こと也ふよ川てかゝらず辛抱を致し。家業を出精して。身ふ相應ふ金銀を持べし。ふくて叶ゝぬ者也。何事ゝも眞先へ入物也。平生ハ倹約を致し。益の事ふ費ゝず。又大事の入用ふハふゝしげふくきゝふべし。唯たゝる事ばかりを去川て。きゝふべき時ゝきゝぬも本意ふき事也。死孫を置て行事も考へ去川て。いのゝ強欲をかゝくゝ。我死んご跡ふて。何よふふるゝ去をがゝしゝとゝふ事も。ふ得置べし。唯子孫の為ぞうりを思ふて。無理ふ欲を去ゝゝり。彼ゝ孫ゝふあらぬ善事がいのふ。夫おもせずふ唯金銀ばかりをたゝゝがるハいのまりよい



世人結交須黄金黄金不多莫不深
縱令然諾暫相許終是悠々行路心

張謂宿屋の
ていあるじ不人情を
いきどおりてこの
詩を作りかべに
張付て別るゝ
ところ

智者といひがたし。いづれを中道のよい所を通るべし。君子たる者は方ふかくするべからず。前後左右をえてゐどよき所を行くべし。いづれの道ふも常ふ始末をえて。金銀を沢山ふ持べし身ふ奢ふ持紙で存じよらぬ人ふ疎ふ成ふ成る事なり。唐詩選七言絶句ふ長安主人の壁ふ題す張謂

世人結交須黄金黄金不多交不深縱令然諾暫相許終是悠々行路心此詩の訳は長謂といふ学者が世世せんが為ふ長安の都ふ来る張謂が金銀布が重くて〳〵有ふ旅籠の主人が紙んごろふもてふしたり張謂は文章を御上〳〵差上て出世せんと思ひしふ存知の外塩梅が悪くて。落第ふて出世を仕損じたり。此有ふ張謂も金銀を出ひふくふて。金銀布がかろくふりしかば。初め頼母敷いひし主人も後ふは冷しらいがろくふ冷て。早く出てゆけがしといふぬむかりの仕方也。此有ふ亭主ふのてつけて此詩を作り。旅籠やのかべふ題つけ置て別るくふり。此詩の心は世の中の交りをするふ。黄金が多くふければ。交りも深くふい。黄金が沢山ふ有ふ上を万事一丁密ふ世話をしてくれるけれ。黄金がふくふると。終ふは悠くたる行路の心とふて。悠くの旅ふてふらぬ人ふ逢ふまうふ考らぬ歌して居るとふ

〜詩也。ふるへ唐人も日本人も人情ハ同じ事とそんしたり。唐でも黄金ぶふけまむ。無未ふさまる事鋳ひふしいろんや日本人ハ猶落情ふ志て。黄金ぶふけまむこふみぢんふさまるとまるべ〜。歌ふ○流浪志て世をゑかねるそのときハ近〜き人も事ざかるふりと見ふね遠ふし用ひるべ〜唐土ふてハ学文のよい者ハ。文章をかいて　天子へ差上御上の御意ふ叶へむ。ほ取上ぶひけて。よい役義を作せ分らる事也。若ほ取上ぶふき時ハ。落第とりふて役義の作せ分ふ〜

又杜甫ぶ詩ふいろ〜。遠窮て俗眼ふ白遭とひりけ詩の

ゑハ。学文のよい智者でも貧乏すまむ。何も志ろぬ俗人ふ白眼まゑ。無未ふさまるとのふ事也又。高適ぶ詩ふ君不見今人交淡黄金用尽〜還疎索とけ詩のゑハ君見ず今時の人ハ。十人ぶ九人近ハ。水くさい黄金のひる内ふ。ふけんをとり。色ひらい数ふけまゑ黄金を用ひ。ふくふると還疎を索といふ事也世の中の落情を憤りて作りたる詩也唐人も日本人もかゑる事ふ〜。又色くと世間を動ゑるふ貪乏人とハ深く交りがさ〜。深く交ると虚ふかりたぶかせまゑをよこさず又いろくさまぐふふんだい申をかけて事ごとまり人事也又猫人と交ゑまむ生猫

ふんだいをぶけかける。此方へふんだいのかる。氣をひふし。ふるふ自然と交りハ深くふる道理ふり。又貧乏人と
ハ。自然と交りも落くふる善ふり。是ハ人情ゞ落いとてい
まりうるゝふ。ゆへかるべ。天地自然の道理也。人こゝ此事を
よく考へてあまり落情くと一かいふいふべうらず既ふ天
地の御恩もかくのごとし。詩経ふいふく。皇天親ふし唯善
ふくゝすとゆゑ。天の思召も。人の善惡ふよりて座ふ
禍福を変じ。ふ。善人も悪をすゝゝ座ふ災ひを去へ悪人
も善をすゝゝ。座ふ幸ひをゆゝ。ふ禍福の変化する事。
ゆをかゝをゝりもを中。いろんや人情ハ甚善と考るべし。

こゝふよりて。行ひをよく考て。大金持とふりて。切の
人と交りをよくすべし。行ひふよりて善惡のうつりか
ゝる事。天の御裁許也。善惡の行ひふよりて。福德も人
情もうゝりかゝる事。今ふ始まりたる事ふゆゝ。昔
しかゝかくのごとし。此事をよく考て身をよく脩め。家
業を出精考て。大金持とふりて。東西南北と親子兄弟の
交りを法すべし。務引欲ふも。考まの賊布ふ金さへゆゝ
む。西も東も皆親子とゆり是ふ遠ふし。身をよくふ
さめ家業出精考て。大金持ふふるべし。左家ゞさりふ考て
人中の大善人ふり。現世後生ゝ大安心大福德を得るの

道ふり。是を正智正見の人といふ。伊ぜ学者藝者のわ
まをを願ふんや
○又いかふ金銀を持ぐよいといつてとて無理非道を行し。
出事をおてためる金銀ハ。ふきよりもそるかよおとる
とおるべし。無理非道ハ大損大ふんぎ大馬鹿の道也。変ゑ
て行すべうらぞ。無理をいひ無理をするハ大損といふ事を
深くおるべし。こををよく考まを悪事ハ出来ぬ者ふり
君子の道ハ近し唯家業を出精しおごりをやめて清浄
ふる金銀を持べし。金銀ハ身をとろし骨を折て。そろく
と功をつをて持べし。よわど骨を折孫を出来がたし。昼

夜かせぎをつらいて。金銀を持べし。身分相應ふ金銀が
ふけをを。よい男も不男ふをつる。よい女も多くをつる。
藝の上ふもわふをつる。よい事をおてもろくをつ
る。智者も愚者ふをつる。学者も文盲ふをつる。人も教つを
うけぬ読ふらふ。貧すをを泥ふふる。富貴ふをを。利根
ふふるといふハ間違ひふし。又馬やせて毛長く人貧ふ
おて智短しといふも変の事也又金銀ぶふけを。
人のをわとふる。金銀がけをが人のかをとふる。伊でも金
銀の一ツを持べし。金銀がけをが人の命も助け。人の首をつ
ぐ事もけり。まけを事も勝とふる事けり。金銀がけを

を一切の事に勝を得る。一切の事に德をする。株家督の賣かいも。金銀ぞ沢山よりはまだ。割合のよい株をかいよい役に成りつゝ。技持切米も割合よりハ。余米に取る其上人の上に立ぶゝ事がよく通る。利根に見える。金銀がいまだ何程どの德用ゝ有まゝ。又持系金のむこ株も身分相應の株かとくに成りつゝ事あり。万事黃金を以て。世世する世の中ゆゑ。黃金がふくてハよい。惜しハ出來がたし。是は今始りたる事に成らず。昔しよりかくのごとし。又不人情に成らず。是ハ金銀よそに成りたる德用ゆゑ。又金銀がふけまだよい株かとくを買事も出來ぬ。

又よい所へよめに成もむとに成る行事ゆゑ。是ハ何たりまゝ。世万事世の道を失ふ。貪ハ諸道の妨げに相違なし。先ゝ黃金がふくても。よい株かとくがよふのゝまゝ。黃金がふくても身分不相應の所へよめやむこに成ます。當時御大名旗本成さゝ。よめ入むこに成ふ。持系金がふくてハ。身分相應の所へも往かゝしゝ。ゆゑんや身分不相應の所へハ。猶くもけぬ筈也。是ハ何ふも欲がふかくて。持系金を是むふ。持系金を持て來る。何程の人でふくてハ。家ハ治りがたし。持系金を持てくる事の出來ぬ人ハ。親も貧乏ゆゑ。持來

る人もたくさんのあさ人あり。家ハ治りがたし。持糸金を持て来る人ハ。何とぶく身も重く何所ぞよとりくの所る人也。此ハ不持糸金を屋心事ばかりと考るべし。是ハ欲をかりふばらず家の治りを思ふべ也

○和論語四ふ藤光廣たのばらくしたのばりさまハ。ふべてよしばし事も。万ぶ道の上ふも。官位昇進も。家の不生也も皆黄金のうてふよりばかる者也とあり。此ハ万事黄金を以て世世する世の中也。黄金ばかりを思ハ不義でも不學でも先生林とよを生る事ばり。又ハ川かうふ清座鋪林ふも出る事ばり。黄金ばふくてハ万事ばしハ出来

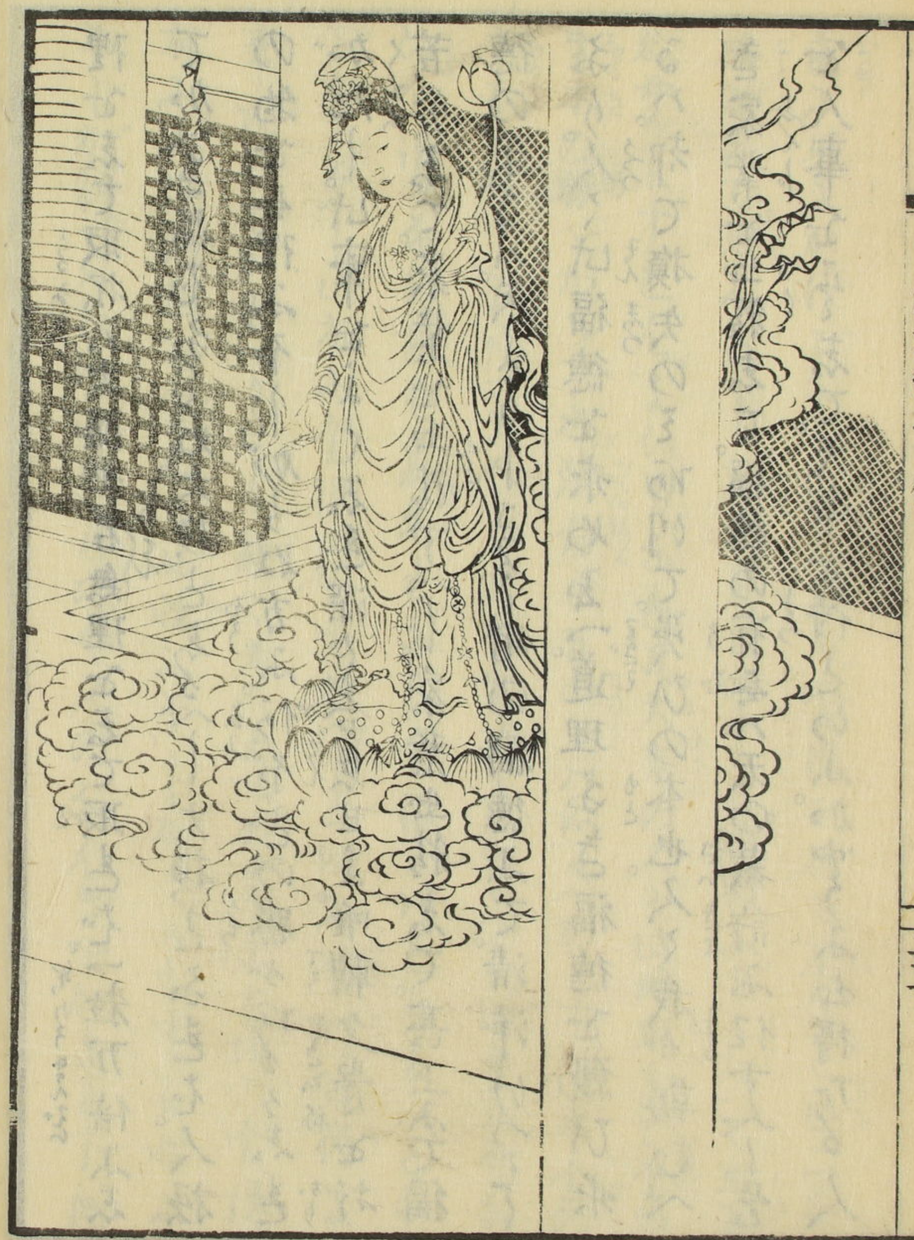
がたし。是ハ近比始りたる事ふばらず。昔しよりかくのごとし。夫れふ唐詩選ふも和論語ふも出とり。是ハ不人情ふばらず道理と考てかくのごとし。是ハ金銀ふそふとりたる德也。かゝるふ自由自在の出来る金銀有ふ。世界中の人ぶ命よかつてもばしがる也。ふを其よい金銀を持人至て欲ふし。是ハ金銀を不しがるばかりふ考て其持べきを名んを知らず唯不しがるばりふて。金銀の出来る修行を世ず考てハ役ふ立ぬと考るべし釋尊も凡生智淺く考て。福因を修せず考て福果を貪ると作せらをたり。此ハ凡生智恵淺く考て。福德の求る

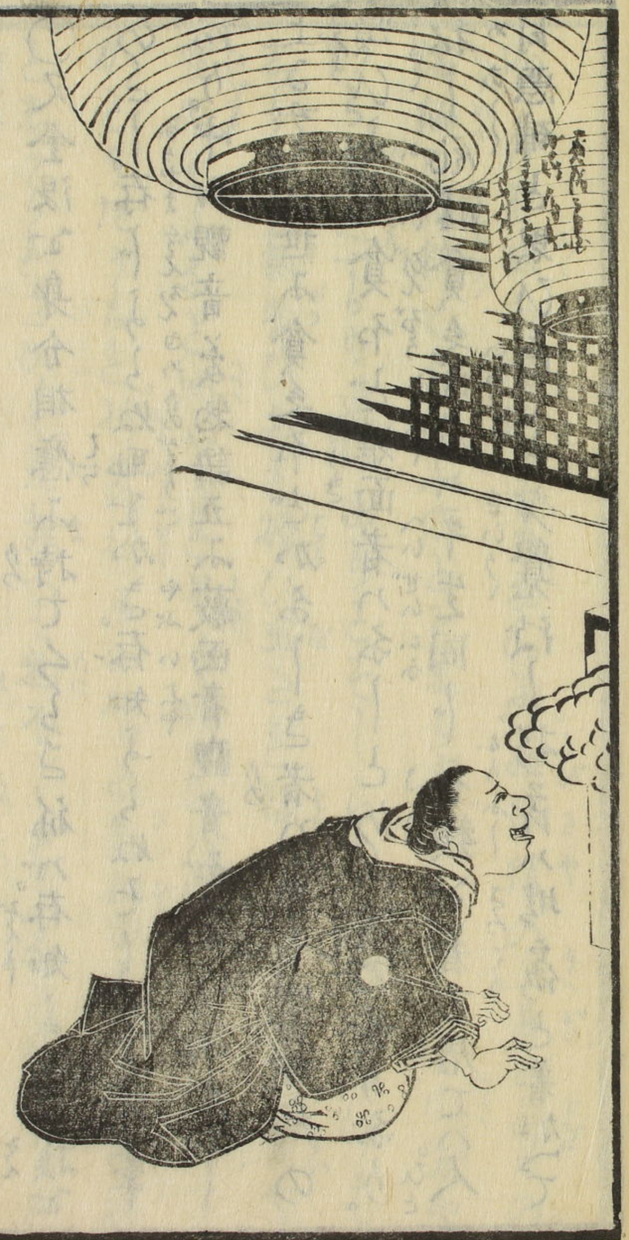
田ハ植ずして。福徳をかりやしなふ。福徳ハ来らず
福徳がやしなくバ。福徳の来る。因を植べし。種さへ植ざれハ福
徳ハ願ふずして来るといふ事也。たとへば菊の花がさく
くを春から苗を植て。芸育すれを。九月ふハ急度花が咲
ふり又春苗も植ずして。九月ふ月ふ月てから。菊の花をさくが
色々さうる事ハ出来がたし。けだしをゐる人発句ふ。秋ふ成てうら菊作ふとなるべし。
つて菊作ふとなひけりと。秋ふ成てうら菊作ふとなるべし。
役ふ立ぬといふ事也。是ハ菊をかりふいらず。一切万物皆
かくのごとし。又米を取らんと思へバ。春種を蒔夏草ぎり。耕
作す色を。秋ハふとところを。米を取也ふるふ春種も

蒔ず。夏かうさくもせずして秋ふふ月てから。米をやし
しがる色。少しも得事ふし。是米を取べき種を植ざるふ
よ月てふり。人間ハ智恵浅くして福徳の来る種ハ植ず去
て。福徳ばかりやしなふ。少しも得る事ふし。何事全
徳の出来る種を植べし。全徳の出来る種といふハ身をよく
治め。家業を出精する事也。全徳の出来る作法へ。
ふを。願ふす色全徳の出来る事。疑ひふし。又たまくハ
全徳の出来る道を去月て。師へかける人ハ色。出ふ魔ぐ
さして。金の生る木の芽を折からす也。其人のすき好む
事を以て。取ふかける。ぢくふき。諸勝負又ハ女をかけて。

逆に取るかけるふり。欲くでも。金銀を持て居ると逆に〻本
略を去て。取んとする。恐ろ数世の中也。此時ふことたて。取と
ねがふふすきだ。よい男ふ也た大方の人が此時取まて金の
生木の根をかゝらす也。残念ふ万は上へいるべかゝず。何卒金の
生木を段〻とそだてふやして。大金持ふなるべし。四も五もふ
い。金銀ばふけきを家来とるり。金銀ばいをとを人とふ
る事一多し。此方ふ金銀の一ッを持べし。一切ふ勝利を得る
事ひけてかぞつゞし。然く考へ。かやうふ大切の金銀
有ふ。人様の物を奪去て。其性ふやしがるべうず。其性ふ
不しがいてい。お海不申ん。況や人のふんぎをかまはず。無

理を去て取ハ大罪也。若無理を去て取まを一粒万倍ふ去
てかつさ孫をふゝぬ大損とふるべし。大損とふまを。人様
の物を無理ふ不しがゝぬ方ふ。何不どの勝がいるゝ去を
かたし。此事をよく去を。深く合点せよ。唯朝夕骨を折
苦労去て。家業を出精すべし。家業出精去て。其上ふて福
徳の来るハ。天より下さるゝ所の福徳ふて。清浄けつむく
ふり。人〻此福徳を求めを。道理ふき福徳を願ひ求
るハ。却て損失のをいかして。災ひの本也。人〻我が勤むべ
き家業を出精去て。福徳の有無ハ天の裁許ふ任すべし。是
を人事を尽去て。天命を待とふかやうふ心得たる人





やぶいしや　觀音がさ河へ
びんぼうふんぎゃ上る所

ひのちべ。天より一の富を落しまふす事絶ひふし。律儀正道ふ勤て。天祿を得て。一生富貴安穏ふくらすべし。是ぞ世ふありがたき君子しらふ。

○又全役を身分相應ふ持てくらさ孫ば。存知ふらぬ損を いくこし。存ぢふらぬ恥をかき。存知ふらぬそしりを受る事 ひり。中山觀音爰物語五ふ藪函者觀音ぞさ河ふ。申し上るやうハ。世ふ貧乏ひどかるしき者ハふし。四百四病の煩ひより貧ひど難面者ハふしとふ読の通りふり。私し風情貧乏困者ハ半生同ど衣類を着て居てハ人目悪敷と思ひ。色くと支覺ぢし。ぢ瓦ハ時病と着かつて

ひのるけを祿ふ據治先もふいふ。彼後の上着ハるるの縮緬ハ損料であろふのとそちらを又ひのおぐる風おやかう。貧乏するの。道理ふふりとそしらを。麁服でもけを。ちうをが氣をひふと。掃ひ虫さを。徐くひるけば。可愛や空腹そふふと明やぐを。早くひるけば。借金をいを碎すかとうたぐちを。ぢ瓦行もいかぐと差和もを。彼法とちうをさいく見舞ひで。想ひしそふふといぢくらを用事のひの時でかり。もけを。得を勝をふ中おやと祭ちを。不時ふもけを。除そふふとふさを。贈るべき時瓦ふ大儀ふがら音信すを。論ひがまちいとひのぐひら

まで。甚だ〳〵ふ意對すまで。大柄者と嘲がまで謙退卑下すまで。輕薄者といひふさまで少し恐れて居まで臆病者と笑ふまで。いろ猶ですまぬ所ふて道理をいへで。理屈者と嫌ふまで内ふ居まで妻子ふせめらまで。外へ出まで他人ふいやがらまで親類猶者ふあらぬ事ふ尾鰭をつけて次第〳〵ふ見えふし。他人ふいんぎんふ會釈ふて段〳〵と表ざかる。養角貪欲ふふりれてふいろふる智者ふ學者ふとまり入て相見へれ。いろんや私〳〵風情の者ふ猶更彼是と配仕れ。段々推察ふさるべし。養角薄情き浮世ふて座れと申上まで觀音

ぞさ門角〳〵石てのふふ安うふいうふも汝ぐらふ通りふり。貪婪身ふふ思ひうらざる。そしりを受ぞひうらざる愁ひふ〳〵。彼金持のする事ふ伺を表てもふむる者也。略きをふごりふうねとふわ。洞ぐりふきを表態ふふと尊ふ。不精者で身持のむさきを怪ふかまふうねと軟成下卑たるを下司近きと悅び。樣智友を發明ふとひ立万事ふ氣の分ぬを。寛活ふりとふぐわ。潛上ふるを優長とふわぞやし大柄ふを威ぞふふ門たと恐ま。短意ふるを勇氣と思ひ。腰拔を怯恐づふいと受へ一切の事ふ何ふふろふふふい。機ぐ利て居て大利根

の人ふりとえふし。他人ハ主君のごとくふ敬ひ来り。親族ハ父母のごとくふ尊ぶ。あるも有らぬも。皆恐れ敬ひ奉ると云ふり。誠ふ観音大士の作ふ間違ふし。人情と云て。金持を貴む事かくのごとし。ふらば人く身をおさめ家業を出精して人の貴び敬ふ所の金銀を持べし。是智恵ゑ覚ふくして。智者と称ら〻く所の。妙法也又貧乏人ハ何を云ても。発ハ是る者也。ふき事を云ても人ぶ称めぬ者ふり。謎ふ近かけて。貧乏人を発ふ。貧乏人とかけて何と解。是を五合徳利と解。其心ハ一升つまらぬとサ。大病人とかけて何ととく。是を貧乏人のふ人ふとえ。その心ハ長持ぶふい

ふ丑ふうろくとかけて。何ととく。是を貧乏人の葬礼ととく。其心ハ跡で法事ぶ出来ぬと是三ツふぶら貧乏人を発ひたるふぞふり。貧乏人ハ一生つまらぬふ相違ふし。此節ふ承知ハ河て金銀の一ツを持べし。金銀の一ツを持ハ我身の自由を失ひ。一生楽をふしと云べし。又金銀を持ハどの人ふらぶ。ハまんりふ。ふろき人ハ何るべからず。其奉ハ次下の文段ふてよく云べし。

ハまり金銀の事ぶかり申して。仁義の道ふかけて所あつて。いやしけれた。中以下の人ハ先身上をよく持事と云ふり。其後仁義忠孝の道ふふもむろ云む所。

孟子疏ふいろく。禮義ハ富豆ふ生て盗賊ハ貧賤ふ起るとゐり。家語ふいろく。勢窮する時ハ攫つき鳥窮する時ハ啄く人窮する時ハ詐ると。論語ふいろく。小人窮する時ハ変ふ濫すと漢書ふいろく。民貧き時ハ。毒邪を生ずとゐり。是等の如き。富貴ふ志た。義理をゐり貧賤ふ志た。恒の如き失ひ。惡と盗をもする者ふ成らとゐふ如ふり。士君子といへた。窮する時ハいやまり多く。いろんや小人ふ於ておや。文選ふいろく。貧賤ふ志を妻子軽し富貴ふ志た。他人重をすとあり是等の文段を

見ても貧ふ志た妻子といへども。禮義も教へも施しがたし。いろんや余人ふ於ておや是よりていづきの道ふも。身をよく治め家をよく齊へ。ふ爲ふ徳ふ根ふ身分相應ふ成くて。何事も治りが身がこ一ツの出入幸。けんかを口論。病氣災難婚礼葬式水難火難盗難等の幸ハでもかでも皆金根の咎へころんでくる仕舞ふ。金根を出して治まりを付孫を付がこ一。聖人ざかろこ文もいろぬ。愚人ざろろこ文もふくてもよいとハいろさぬ。ハでもかでも家役村役町役ハ出さ孫をあろぬ。豆藏でも非人でも。甚日くのかり物を出さ孫

を家業に生來がこゝいろんや相應にくらす者に。猶更
とゝるべゝ。貴人でも。下人でも身分相應に金銀をおく
てに。一日もくらしがこゝ。是によゝ何卒金銀を持ゐ〳〵と
いふ事也。夫れ金銀にふくてもよい。おのゝゝ隨分と安
ふくくらすといふ人が。世勝に次第併し。此本の通枝見に
世無用。所詮世ゝのいろぬ人也。死ぬけいと智者と。死ぬけ
ゝと愚者とに。此方の相違よりいろ。唯中智者の者共が奇
合てよき道を通らんと相談するの已

日用心法錄三編中終